

シンポジウムを終えて

野中浩一

「共生」と一口に言っても、その視野がきわめて幅広いことは、わずか8名の学科教員が問題にする「共生」がこれほど多様であることに端的に現れているといえるだろう。身体や環境、さまざまな諸文化との共生を考える学科にあって、「共生学」とは何かを今一度考え直す作業は、教員としてはどうしても必要に思えた。

しかし、今回のシンポジウムも含め、すべては教育事業の一環として行われたものであり、まずは学生たちとともに考えていくのが一番の目標だった。大学の学びはもはや教員が学生に一方通行で伝授するものではなく、共に研究し、学びあっていくものはずだ。その意味で、研究と教育を杓子定規に分離する必要はないだろう。

今回のシンポジウムで忘れてならないのは、「共生」が美名に終わる危険を潜在させていることで、過去の事例を紹介した上野報告が指摘しているように、その陥穽には注意がいる。その意味で「胡散くささ」があることは、シンポジウムのタイトルを決める際にも意識されていた。どうしたら私たちがその陥穽に陥ることなく「共生」を実現できるのかは、まだこれからの課題であるが、最首が指摘した種々の点をあえて簡略化した「いのち共生学」をいま少し考えていきたいと思う。

折りしも、2009年は日本共生学会が旗揚げした年でもある。共生学が科学を標榜するには、それなりの方法論の基盤が必要だろう。2009年度のノーベル経済学賞を受賞したエレノア・オストロムのコモンズ研究は、社会科学ともいえる内容で、今回の報告のなかでは、小林正典の問題意識に通じるものがあるかもしれない。

ただ科学かどうかはさておいても、それぞれの方法論に基づいて実践をつづけるなかで、立ち止まることを忘れないで、いのちの発露を教員と学生とが共に展開していくことが、私たちの目指す共生「学」のひとつの姿のはずだ、と直観が教えてくれる。とくに第2部で報告のあった小林芳文、大橋、堂前、矢田と学生たちとの活動は、そのことを端的に教えてくれるし、堂前が言及したモード2の試みといえるかもしれない。本年度は澁谷によるネパールフィールドワークも実施された。そうした活動がさらに多くの領域に広がって、和光らしい共生の実践が拡大していくことを願っている。

今回のシンポジウムには、間近だったにもかかわらず、公共施設などに送付させていただいたパンフレットをご覧になった学外の方にも参加していただき、望外の喜びだった。学祭期間中の開催は前代未聞とも聞いているが、地元の地域の方ともこうした形での交流を深めていければ嬉しいことである。

シンポジウムも含めて、裏方として多くの手助けをしていただき、休日出勤までしていただくことになった多くの事務の方々にも、心からお礼申し上げたい。

[和光大学現代人間学部身体環境共生学科長]